改正章句附

正信偈念佛和讃

特別5人

文正堂藏

52. 6. 9
77W21726

歸命无量壽如來
南无不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立无上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无导无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵刹
一切羣生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時羣生海
應信如來如實言
能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味

攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋僧之雲霧
常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五悪趣

一切善惡凡夫人聞信如來弘誓願佛言廣大勝解者是人名分陀利華

彌陀佛本願念佛邪見憍慢惡衆生信樂受持甚以難難中之難无過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機
釋迦如來摩伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念弥陀佛本願
自然卽時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无尋光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願
廣由本願力廻向
爲度羣生彰一心
歸人功德大寶海
必獲人大會衆數

得至蓮華藏世界
即證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死園示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解

報土因果願誓願

往還廻向由他力

正定之因唯信心

惑染凡夫信心發

證知生死即涅槃

必至无量光明土

諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造悪値弘誓
至安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散与逆惡
光明名號顯曰緣
開入本願大智海
行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍
即證法性之常樂

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲无倦常照我

本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜无爲樂
必以信心爲能入

弘經大士宗師等
拯濟无遐邊極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

初重
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

一弥陀成仏のこのかた
いまゝ十劫とへたまへり
法身の光輪きわもなく
十世の盲冥ことごとくてらしたり

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

智慧の光明えらぶし
有量の諸相ことごとく
光曉かぶらぬものはなし
上 真實明に歸命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

二重
南无阿弥陀仏引
南无阿弥陀仏

●南无阿弥陀仏

●南无阿弥陀仏

●南无阿弥陀仏

●南无阿弥陀仏

解脱の光輪きわもなし

光觸かぶるものはみな

有无をはなるとのべたり

上平等覺より願命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

光雲无碍如虚空
一切の有碍ましまさざりし
光澤かぶらぬものぞなき

上
難思議往生願命せよ

二重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

清淨光明ゆゑなり

遇斯光のゆゑなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を願命せよ

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

佛光照曜寂然第一

光炎王佛とおつけたまへり

三塗の黑闇ひらくなり

大應供に歸命せよ

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

二

道光明朗超絶せり

清淨光佛とまうすなり

ひとたび光照かぶるもの

四

業垢をのぞき解脫をう

慈光をかぶるがゆゑなり

ひとたびあうたてまつるところに

法喜をうとそのべたまふ

中

大安慰就歸命せよ

光明の闇を破するゆへ

智慧光佛とつけたり

一切諸佛三乘衆

上ともに嘆譽したまへり

光明てらしたまへるなれば

不斷光佛とぞつけたり

聞光力のゆへなれば

上心不斷にして往生を

佛光測量すべからず

難思光佛とぞなづけたる

諸佛いまだ往生嘆じつ

下 弥陀の功徳を稱ぜむ

神光の離相とぞうされば

无稱光佛と名づけたり

曰光成佛のひろきなだ

中 諸佛の嘆じたまふ

二 光明月日勝過して
超日月光をおづけうり
釋迦嘆じてをそうをを
上 无等等と歸命せよ

弥陀初會の聖衆へ
等數のおよぶことぞなき
浄土を祈がうんひとみな
下 廣大會に歸命せよ

安樂无量の大菩薩
一生補處にてまします
普賢の德に歸してこそ
中 穢國ゆかりぞ化するぬ
十方衆生のためにこそ
如來の法藏ありがたけれ
本願弘誓に歸せしむる
中 大心海に歸命せよ

観音勢至も後とあふ

慈光世界を照曜し

有縁我度しとぶらふ

下 休息あることまりなし

安楽浄土にいるをば

五濁悪世かへりて

釋迦牟尼佛のぶらひて

下 利益衆生いきるなり

神力自在なるこゝ
測量しべからざるこゝろ
不思議の德をあらはす
上无上尊なる歸命せよ

安樂聲聞音薩衆
人天智慧かぎりなし
身相莊嚴みなおなじ
他方に順じて名とつる

中

顏容端政たくひなー
精微妙軀非人天
虛无之身无極體

上
平等力を歸命せよ

安樂國なる稱ずるひと
正定聚にこそ住するを
邪定不定聚くるなー

上
諸佛讃嘆ーたまへり

十方諸有の衆生へ

阿弥陀至徳の御名をきき

真実信心いくらもなべ

上 かわきゝ所聞を慶喜せん

若不生者のちうひゞへ

信楽まことにたいろ

一念慶喜をとるひとハ

中 往生かならずさだまる

五 安樂佛土の依正を

法藏願力のなせるなり

天上天下にたぐひなし

中 大心力發願命せよ

安樂國土の莊嚴へ

釋迦牟尼尊のみことにて

とくとものべたまふ

上 无稱佛發願命せよ

已今當の往生を
この土の衆生のえらべば
十方佛土よりきたる
上无量无數不可計
阿弥陀佛の御名とき
歡喜讃仰せしむまで
功德の寶玉具足して
一念大利无上なり

たとひ大千世界ふ
みてらん火をもとをるとも
佛の御名をきくひとは
ゆゑに不退ふかきをえつ

神力无極の阿弥陀へ
无量の諸佛わたまふ
東方恒沙の佛國より
中
无數の菩薩ゆきまふ

自餘の九方の佛國も
菩薩の往覲みるかなど
釋迦牟尼如來偈をとなて
中 无量の功徳をほめたまふ
十方の无量菩薩衆
徳本うゑんたりふとて
恭敬をいたし歌嘆を
中 みるひと波旬皮を歸命せよ

七寶誦堂道場樹
方便化身の淨土あり
十方來生きいむなし
誦堂道場礼をへ
妙土廣大超數限
本願莊嚴よろこべる
清淨大攝受そ
稽首歸命せむべし

自利利他圓満して
歸命方便巧莊嚴
こゝろもことばたえぬれば
中 不可思議尊と歸命せよ

神力本願及満足
明了堅固究竟願
慈悲方便不思議
中 真无量哉歸命せよ

●五十六億七千萬
弥勒菩薩いとしとん
まことの信心ひとり
このさびさびとそくび

念佛往生の願による
等正覺にいたるひと
ときいち弥勒おなじく
大般涅槃さとるべし

真實信心うるゆへに
となへいち定聚に入ぬべ
補處の弥勒におなじくそ
无上覺をさとる釈
像法のときの智人も
自力の諸教をさしおきて
時機相應の法をえらべ
念佛門にぞいりたまふ

弥陀の尊願に帰したてまつる

信樂まことにうるをもて

憶念の心は称するなり

佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の

選擇本願信じてもとべ

不可稱不可説不可思議の

功徳へ行者は身にみてり

朝晨

●本師龍樹菩薩へ

智度十任毘婆沙等

たくまておろく西とほめ

そえて念佛せろう

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩とおぼくど

有无の邪見と破ゼと

世尊へ称てとそまま

本師龍樹菩薩へ

大乘无上の法とときたまへ

觀喜地と證したてまつる

念佛をもはらとすべし

龍樹大士世にいでゝ

難行易行の道をわけ

流轉輪廻のくるしみを

弘誓にのがれしめたまふ

本師龍樹菩薩の
おしへたまへるきうんひと
本願心にうけしめて
ひとすらに弥陀を稱ぜば
不退ぜうとみやらん
ろんとおもうんひらきま
恭敬の心に執持して
弥陀の名號稱ぞ

御日中

●南无阿弥陀佛の廻向の

息徳廣大不思議おて

往相廻向乃利益にへ

還相廻向ゑ廻入せり

往相廻向の大慈より

還相廻向ハ大悲より

如來乃廻向ゑりとゞ

浄土の菩提いらゞせ

弥陀観音大勢至

大願のふね乗しんぜ

生死せうみにうかべたり

有情ぞよろこのをそへ

弥陀大悲の誓願ぞ

ふく信ぜんひとへみち

弥てまうろくもへだてず

南无阿弥陀佛ととなへ

他力此信心うるひと
うやまひおそれうやま
ひとをもちてまづ親友を
教主世尊のたまへり

如來大悲の恩德へ
身骨粉にくだけても報じ
師主知識の恩德も
ともにこれを謝とす

改悔文

そもそもくの雑行雑修自力はさらなりとて一心に阿弥陀如来我等が今度の一大事の後生御たすけ候へとたのむ一念ひとへに往生一定御助け治定とぞんじ候へ

の称名は御恩報謝とぞんじよろこびまゐらせ候へ

聴聞まゐらせ候ことは御開山聖人御出世は御恩

次第相兼の善知識のなさる
ざる御勧化御恩ありがたく存
し候このうへさぞかしとも存じ
る御おきて一期ばかりの
まりとぞ存じ候

末代无智の在家止住の男女たらん
ともがらはこころをひとつにして南無弥陀
佛をぶつたのみまゐらせさらに餘の
へ事をまじへず一心一向に佛たすけたまへ
まうさんに衆生ばかりの罪業は深重なり
とも必ず弥陀如来はすくひたまへ

べしとれたるうちに第十八の念佛往生の誓願
はさうなりかくのごとく決定しぬるうへは
稱てもさいなんてもいのちのあるかぎりは
稱名念佛をぐるりのあるかぎり
それ八万の法藏をきはめても後世を
ぞうしらぬ人と愚者とはいふとも一文不知の
尼入道なりとても後世をしる智者
とをもひなさるべき當流のこころはある
がちがひたる聖教をよみたりのはなし
なりといへども一念の信心をいれたる
ぞ凡人らしからぬ事なりとぞ思ひ

聖人の御ことばなれども一切凡男女たゝん身へ
弥陀の本願を信じ奉りてへふんだるを
とゝとゝのゝべゝとおもはせ給ふこゝろ
ゆへ小いろなる女人おもとゝいへども
雑行をすてゝ一念弥陀如来今度の
後生たすけたまへとゝ申さん
人へは人も百人も弥陀の報土
に往生をとゝげる事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夫在家凡尼女房たゝん身へ
も形く一心一向に阿弥陀佛とゝなへたの

まうしたてまつりて後生をたすけたまへと申さん
人びとをば御ようけあるべしとおもひ
とりてさいごにこころの心をめぐらすべし
これとなほ弥陀如来の御ちかひの他力
本願とを申しをもひこのうへをなを後生の
たすけたまへとのうへにてありがたきを
思ひ出だして南无阿弥陀佛〳〵を
まうすべきなり　あなかしこ〳〵

抑男子も女人も罪のふかきもがなを
諸佛の悲願にたのみたてまつる時分は
末代惡世なれば諸佛の御ちかひに入中

かゝぐる時あり是ゆゑに阿弥陀如来
と申奉るゝ諸佛ゆゑにこゝれて十惡五逆の
罪人をこれをとけんとゝ大願をおこし
給ひしゝ阿弥陀佛と申奉給へりこれ
佛とゆゝたのゝて一念御手をけ候へと申
さん衆生をこれをとけゞば正覺をとらじと
ちかひ給ひ候ゝ弥陀ゆゑに我等ゞ極
樂に往生せんことを願ふゝゝ此
ゆゑに一心一向に阿弥陀如来たゝとけ給へ
とゝゝく心まゝぐひなく信じて我身の
罪のゆゝる事をぐちをして佛をまゝうを
はいゝせて一念ゝ信心をぐまゝんとゝ

ハ十人ハ十人ながら百人ハ百人ながらみな
浄土に往生すべき事さらにうたがひなし
このうへにハなほ／＼たふとくおもひたてまつ
らん心のおこらんときハ南無阿弥陀仏
／＼と時をもいはず所をもきらはず
念佛申べしこれをすなはち佛恩報謝の
念佛と申なりあなかしこ／＼

信心獲得すといふハ第十八の願をこゝろうる
なりこの願をこゝろうるといふハ南無阿弥陀佛
のすがたをこゝろうるなりこのゆへに南無と帰
命する一念のところに發願廻向のこゝろ

あるべしこれをもつてこれを弥陀如来凡夫を
廻向したまふ故なり
八今諸衆生功徳成就とときたまへ
无始以来はくうとして悪業煩悩をのこ
るこころもなく願力不思議をもつて消
滅せるゆへに正定聚不退のゆへに
ゆゑに任運にありこれまよりて煩悩を新せず
きたて涅槃をうるゆへにこのこころをもつて此義
當流一途の聊談なり他流の人
對してかくれなく沙汰すべきなり聊爾
能々思ひよるべきものなり

聖人一流の御勧化ありがたき信心なり
て本とせらるる候そのゆへはひろく
雑行をなげすてて一心に弥陀に帰命を
もつぱら不可思議の願力にまかせ佛の
より往生は治定せしめたまふそのこころをも
一念発起入正定之聚とも釋したまへり
称名念佛は如来ひろく往生をさとらせ
御恩報盡の念佛とこころうべきなり
あらあらかしこ

抑當流の他力信心はいかなるものぞと聴
聞して決定せしむる人々はその信心の

通ずるを心底におさめて他宗他人に
對して沙汰をなすべからざる路次大道にて
くれ在所にてもひろく人をもまねぐべきなり
これを讃嘆すべきなり守護地頭方
にはたてまつる信心をえらびとりて疎略
の儀あるべからず公事をまもるべし

諸神諸佛菩薩をおろそかにすべ
からざるなり南无阿弥陀佛の六字にこと
おもるべからず外に王法をもつて
おもとし内心に他力の信心をたくわへて
世間の仁義をもつて本とすべしこれまた
わが當流のさだめるところの掟のおもむきなり

あらとこころうへをさしのあらりらうらしく

文明六年二月十七日　書之

抑毎月両度乃寄合の由来ハあふの
なるべしとゆふに他のこふあるん
自身ハ往生極楽乃信心獲得の
ことなるゆへあらまほしく往古より
いまにいたるまでも毎月の寄合と
いへどもいたくにもこころあること
ぞなきふ信心の沙汰ばかりて
もてこれあり　こころふ近年ハ付くまる
寄合のときハ酒飯茶ばかり

だうりをてみるに退散せりこれ
佛法此本意をもつぱらとさるべき次第
あらいなるに不信心の面々一段の不審
をたてて信心は有无と沙汰をいた
とこそ所詮も形く退散せむる
条きうくべからざるおもんぐりぬるく
思案をめぐらすべきこと所註
自今已後ふたたび不信心の面々
たゞひとへに信心は讃嘆あるべきこと肝
要なり
そもそも當流の安心はともかくもいたとらへ
あるべきなり身の罪障のふかき

ちからばかりをもゝ多くの雑行のこゝろと
やめて一心に阿弥陀如來に歸命して
今度の一大事はれ後生たすけたまへと
ふかくたのまん衆生をばもれなくたすけ
たまふべしとこゝろにうたがひなく
うたがはざるこゝろをもつる人へ
まことに百即百生ありべきものなり
にゝ毎月の寄合ばかりして報恩
謝德のためをこゝろざしなされて真實の
信心を具足せしめる行者ともなり
へるものなりなかるべく

明應七年二月九五日 書之

毎月両度講衆中へ　八十四歳

夫人間の浮生なる相とつらく観ずるに
おのおのこの世の娑婆中終
はは已のごとく形なる一期なりこれいつまで
万歳の人身なりけることと人事ときぐず
一生まことしやかいまゐいうりて
なまら百年北形躰とたのべども我や
さる人やさきけんとも云ぶあるとも
きぶをくれさるべん人ことのごと
ことの露よりもたぶんしこうさんば

朝ハ紅顔ありて夕ハ白骨となる
身なりとそ不定常ハ風きたりぬるがごと
とゝまりちるこの世のまさかこれちまちまとゞ
まりのこるなごりたえぬるがごと紅顔ハ
たゞ變じて桃李ハ春ひとゝうしなひ
ぬるとなれば六親眷屬あつまりてなげき
かなしめども更ハその甲斐あるべからず
さてもなるべき事ハ形のごとく野外
ハ夜半ばかりとあつまりて
ねもごろにたゞ白骨のこれるをも
中くとなりなりさるべき人間のこゝろ形
事ハ老少不定のさうにあれば誰の人か

ゝく後生の一大事は心をかけて阿弥
陀佛とふくたのみまゐらせて念佛
はうしなどをたしなまれあるべしと
抑當國摂州東成郡生玉の庄内
大坂といふ在所は往古よりいはれる
所なり

約束のいはれなこそ明應第五の
秋下旬比なりけるとぞ
在所とぞ
一宇の坊舎を建立せしめ當年八十
とぞ三年此歳暮とぞ
すなはち往昔の宿縁あさからぬ目縁

形りとおぼくんぐらねをふつかさこの
在所ハ居住さもある根元なるぎ不一生
涯をよろやとくすぐ榮花榮耀ハ
ことはまさる花鳥風月ハもろとぐ
あくれ無上菩提のたのみ信心決定の
行者も敏系目せしめ念佛ともまうえん

とまうすも出來ぎ一つおろそかなる色を
おりて一念ばかりぐ色とはぐらうあり
まさらうる世間の人ぐも偏執の
やうもいりもんぐ題目ぐんぐも
出來ぐんとたいもみやうふこと是祭
とて執心のこころをやめて退出とぐ

ものなりこれよりてひとへに貴賤道俗と
ともに円金剛堅固の信心を決定せしめん
あさましき弥陀如来の願ふかうたのもしい
別して聖人の御本意ふかくたのもしく
ものの数にあらざる愚老ごとき当年八
十四歳まで存命せしめ奈不思議なり
まことに当流法義にあひかなふ人数は
おほぜい本望のいたりあさましきかぎり
ものの数にあらざる愚老当年は夏ころより
遠例にまして名残をしく本復のごとく
にて形のごとく当年寒中いらかるべ
往生の本懐とこころえ条一定とおもへ

えんぎりあるまく存命のうちすまく
信心決定ひとかしと朝夕ねんぶつ
まことに宿善まことにいひがら述懐の
こころもつかぬこころもやむことなしまことに
在所に三年比居住とるその甲斐も
やはりべしかりしかるべくこの一七ケ日
報恩謝のこころにて信心決定あり
我人一同に往生極樂は本意とげ
たまへるものなりこころ
明應七年十月廿日より記あ
てまことよろこび入る信とぞ
ぞんじそのあらう

抑今月廿八日の報恩講は昔年より
流例にうけて近國遠國の
門葉報恩謝德乃懇志とて
ところ〻二六時中に称名念佛今古
退轉なしこれまこと閑山聖人の法流
一天四海の勸化比類あるべからざる
ところなり〻ぬ〻ぬ〻晝夜に時節を
あひ〻〻不法不信の根機をとゝめて
往生淨土の信心獲得せしむるなり
これ〻〻〻〻今月聖人の御正忌に
報恩たるべし〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

とひてゝ報恩謝德はせんとゝぶ
はるかの欲てゝふようてゝ其家
念佛者と号するをまこゝろ心底より
當流の安心決定をえしぐるひい
名聞あつしゝてゝ報謝とゝん
とし九風情てゝあつうてゝのゝうゝ

べゝとぐる次第ゆゝうてゝ
万里の遠路てゝ其の艾太の辛勞を
いゝて上洛のゝてゝらゝぐゝらて
名聞ひとるゝの心中に住ることゝ口惜
次第ゆゝあゝぐゝやてゝる不足の所存を
いゝ四邑てゝ无宿善の機ゆゝり

たちまちに三業をあらためくるも
五二の懺悔といふ一心の正念より
おもむくべきの聖人の御本意達せ
ざるのゆへなり
一諸國參詣のともがらもこれを
在所ときゝわたるべきなり又
關屋渡の船中にてかさゝふそ
えごうりゆく佛法方の次第と顯案
人ふかくこと考へべきこと
一在所ふをして當流ときゝた沙汰
せざるめづらしき法門と讃嘆者
おく宗義とあれおりとも名目ふん

とをはらん人こそまことに匹夫婦女の
僻案なり自今已後かゝる停止
をぐるべきの形り
一この七ケ日報恩講中にてひとへに一人も
のこらず信心未定のともがらの心中式
なるべき今改悔懺悔の心をおこして
真実信心を獲得をぐるべきのうり
一ことより我安心のこゝろもはらまを決定
せしめ分もなきあひだその不審を
いたしをくべきなり心中とうをぬのの
まことにかゝるたぐひあるべしこれとかの
あひだうめるところあしのまた心中を

かゝぐすして當場をいひけんとする
人のこゝろ勿躰なき次第なり心中と
はこゝさぐかうして直實信心ふたつく
なるべきことのもとり
一近年佛法の棟梁たる坊主達我信
心いきらゝて不足なる結句門徒同朋へ
信心の決定なるあひだ坊主の信心不足の
ことまつたくなるべきなり愛にまつたる条
言語道斷の次第なり己後ゆめゆめ
師弟とも不一味の安心に住ずる事
坊主分の人ちうこゝろうくことをもつて重存の
也そのゆえんあり言語道斷なる

べからざる次第なりあるいは酒をのむ
人民停止せよというてあれども佛法を
世間門徒ばかりは重宝するゆえなるべし
もしも酔狂のもの出来せばひとりの
べからざるあんじ坊主分へ停止
せずまもるべき興隆佛法もいとう
べし然るに一盞をもすすめ
ても佛法ばかりのもの
のもの[illegible]とそ[illegible]
ふく愚案あるべしとの道理の
一信心決定のひとも細に同行不會合
とをいとうべし信心の沙汰あるべ

つまるところ真宗は繁昌の根元なり
一當流の信心決定のときは
南无阿弥陀佛は六字のそなはるなり
ゆゑなりとぞ善導釋したまへり
言南无者即是歸命亦是發願廻向之
義言阿弥陀佛者即是其行なり

南无と衆生の弥陀に歸命をなれば阿弥陀
佛のそなへ衆生をよくまうめして万善
万行恒沙の功德をさづけたまふなり
このゆゑをもつて阿弥陀佛は其行と
いふなり
ゆゑに南无と歸命をば
機と阿弥陀佛は法とぞ

一躰なるをもて機法一躰也
南无阿弥陀佛とは衆生かなるを
阿弥陀佛のむねし法藏比丘たりしを
衆生佛ゆゑにかなれも正覺ゆゑと
ちかひまします本願その正覺をもて成
たまひしをもてこそ南无阿弥陀佛
ありとなりうるゆゑに
往生はさだまりくる證拠なりされば
他力の信心獲得をいのむべきなり
六字はあるべきと落居をべきなり
そもくはの八条北をもむかしの
ゆゑるあひだ当寺建立をもて九ケ年に

とゝぐり毎年ゝ報恩講中にとゝく
面〻各〻不隨分信心決定のゝ領納
ありとゝゝども昨日今日までもそれ
信心のともがらに不同なるゆゑ所詮
なにゝの欲をもとゝくへども當年に
報恩講中ゝかゝりて不信心のゝも
がゝ今月報恩講のゝゝに早速ゝ
真實信心を獲得あゝて年〻を
經とゝゝも同篇たるべきやうにゝえ
なりゝるゝゝゆゑ愚老が年齢七十ゝ
七旬ゝあまりて來年の報恩講をも
期しがゝに身形あゝゝゝ多〻ゝ真實

決定信とゑしんあらば一ハ聖人
今月の報謝のれゑ一ハ愚老ごろ
七八十年ぬあひだ乃本懐ふかし
なんべるおもひをのぶるなり
文明十七年十一月廿三日

太子七高僧之御忌日　法然上人御忌日

聖徳太子　二月廿二日
龍樹菩薩　十月十八日
天親菩薩　三月三日
源空上人　正月廿五日

見真大師（弘長二年十月廿四日御入滅満九十歳）

一　信如上人（正安二年正月四日遊　六十七才）
二　覚如上人（観応二年正月廿日遊　八十二才）
三　善如上人（康応元年正月廿日遊　五十七才）
四　綽如上人（明徳四年正月廿四日遊　四十四才）
五　顕如上人（永禄元年七月廿日遊　五十才）
六　准如上人（寛永七年十月廿日遊　五十四才）
七　良如上人（寛文二年九月十日遊　五十一才）
八　寂如上人（享保十年七月十日遊　七十五才）
九　任如上人（元文四年八月六日遊　六十七才）

墨鑑和尚　五月廿六日
道綽禅師　四月廿七日
善導大師　三月廿七日
源信和尚　六月十日

六 巧如上人 永享十年二月晦日 遊 六十二歳
七 存如上人 長禄元年六月八日 遊 六十二歳
八 蓮如上人 明應八年二月晦日 遊 八十五歳
九 實如上人 大永五年二月二日 遊 六十八歳
十 證如上人 天文六年八月十九日 遊

天 湛如上人 寛保元年十六月八日 遊 二十七歳
七 法如上人 寛政元年十二月晦日 遊 八十三歳
八 文如上人 寛政十年六月晦日 遊 五十八歳
九 本如上人 文政九年十二月十日 遊 四十九歳
十 廣如上人 明治四年八月十九日 遊 七十二歳

東
十一 教如上人 慶長十九年十月晦日 遊 五十七歳
十二 宣如上人 万治元年七月朔日 遊 五十七歳
十三 琢如上人 寛文十年四月晦日 遊 四十二歳
十四 常如上人 元禄七年五月晦日 遊 五十四歳

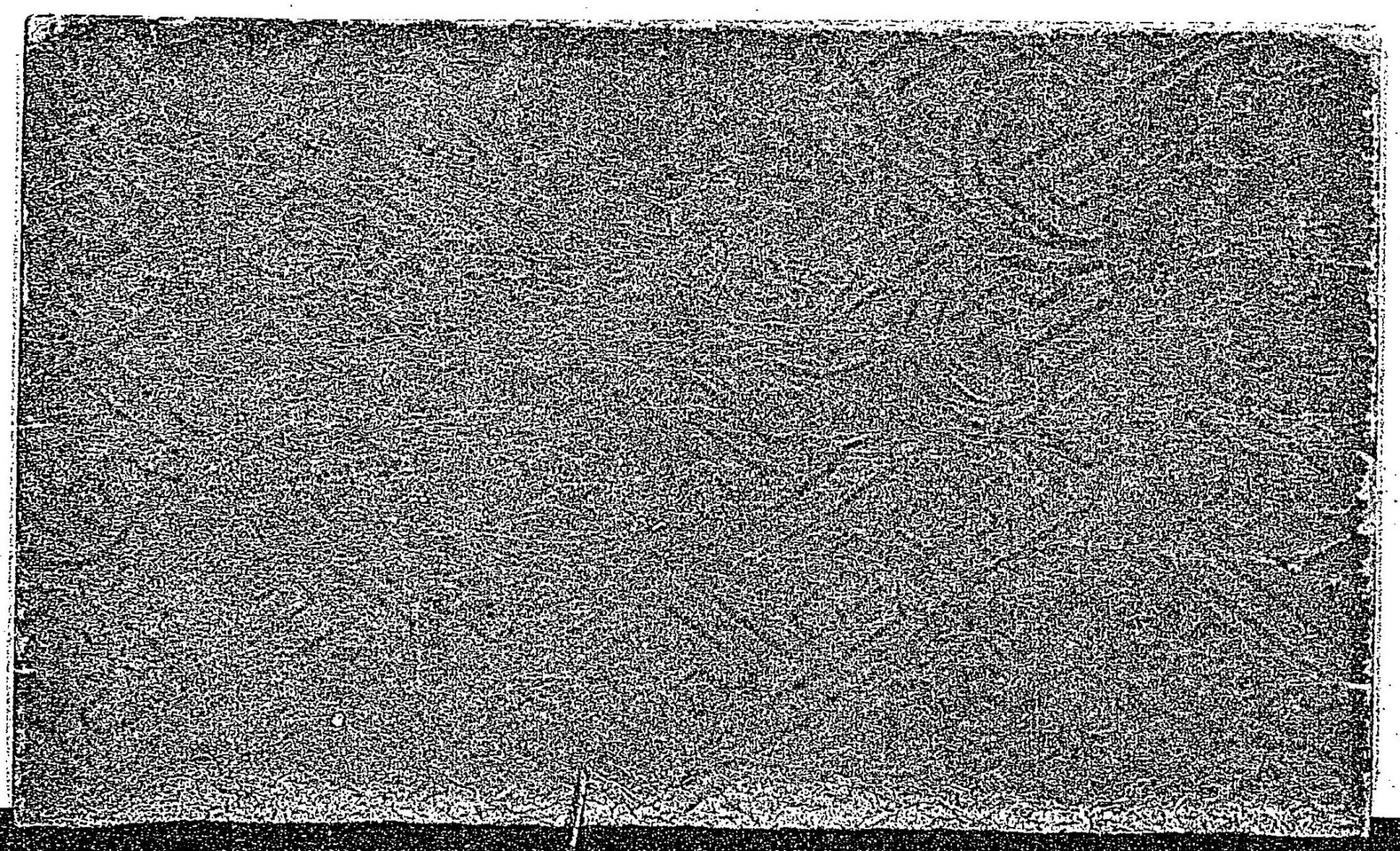
天 一如上人 元禄十二年四月十日 遊 五十二歳
七 真如上人 延享元年十月晦日 遊 六十二歳
八 從如上人 宝暦十年十月十日 遊 四十二歳
九 乘如上人 寛政四年二月晦日 遊 四十九歳
十 達如上人 慶応元年十二月晦日 遊 八十六歳

明治十四年三月五日 出版御届

同 年同月 刻成

定價八錢

編輯并出版人 京都府平民 藤井卯兵衛
下京區十七組醒井通五條北入小泉町百一番地



300943-000-4

特71-513

正信偈念佛和讃

藤井卯兵衛／編

M14. 3

ABA-0042

正信偈念佛和讃　全

特71
513
東京圖書館
和書門
教會類
190函
18架
二二號
一冊